

彫美連続講座 2023

野外美術館をつくったころ

いまから37年前の1986(昭和61)年7月に札幌芸術の森野外美術館が開館しました。

札幌郊外の起伏に富んだ緑豊かな丘陵地に、日本の第一線で活躍する彫刻家たちがこの場所のために新たに制作した約50点もの彫刻が設置されたのです。他に例を見ないこの取り組みは、当時、国内外からも注目を集めました。さらにその後、1990年と1999年に拡張し、現在、7.5ヘクタールの敷地に63作家73点の彫刻を鑑賞することができます。

そのコンセプトづくりや作家選定、作品配置などを担ったのは、度重なり開かれた有識者による委員会ですが、そのなかで重要な役割を果たした一人に酒井忠康氏がいます。

このたび酒井氏をお招きし、札幌芸術の森野外美術館をつくっていたころのさまざまなお話をうかがうことにいたしました。昨今の彫刻を取り巻く社会的状況の変化を踏まえつつ、当時を振り返りながら、これからのあり方についても考える機会になればと思います。

- 日時：2023年 **11月25日(土)** 10:30～12:00 (開場10:00)

オンライン聴講お申し込みの方は、当日時以外に1週間後まで録画配信をご覧ください。

- 会場：SCARTSスタジオ (札幌市民交流プラザ2階)
札幌市中央区北1条西1丁目(地下鉄大通駅30番出口から西2丁目地下歩道より直結。徒歩2分)
- 料金：500円
- 定員：会場聴講 60人、オンライン聴講 60人 (いずれも事前申込制)
- 講師：酒井忠康 (世田谷美術館館長)

1941年北海道生まれ。慶応大学文学部卒。1964年神奈川県立近代美術館に勤務。同美術館館長を経て、現在、世田谷美術館館長。1986、88年ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館コミッショナー、1989、91年サンパウロ・ビエンナーレ日本展示キュレーターなどを務める。幕末明治期の美術をテーマとした『海の鎖』『開化の浮世絵師清規』で注目され、その後、美術評論家として活躍。著書に『野の扉』『影の町』『時の橋』『遠い太鼓』(以上小沢書店)、『若林奮 犬になった彫刻家』『靴に入れた本の話』(以上みすず書店)、『現代彫刻の世界』のサブタイトルをもつ『彫刻の庭』『魂の樹』『森の掟』『彫刻の絆』(以上小沢書店)、『彫刻家への手紙』『彫刻家との対話』(以上未知谷)、『早世の天才画家』(中公新書)、また郷里の少年期を描いた童話集『海にかえる魚』(未知谷)などがある。近著に『遅れた花—私の写真ノート』(クレヴィス)がある。

- 聞き手：吉崎元章 (本郷新記念札幌彫刻美術館館長)

申込方法

- 会場聴講 11月1日(水)より電話受付(先着順)
011-642-5709 受付時間10:00～17:00 月曜日休館
- オンライン聴講 下記URLから11月1日(水)10:00より申込開始
<https://chobi20231125.peatix.com>

※申込にはPeatixの会員登録が必要です。

※オンライン聴講は定員に達しない場合でも11月24日(金)12:00に締め切ります。



カンジキを履いての冬の現地視察(1985年1月)
左から2人目:加藤多一(市民文化室長)、4人目:酒井忠康



造成中の野外美術館(1985年6月)



作品選定委員会(1985年6月) 左から、竹岡和田男、尾崎行俊(行政代表)、匠秀夫(委員長)、鬼丸吉弘、酒井忠康



ベニヤ板の当寸模型によるシミュレーション
(1985年11月)